

# 弥生時代における水田やその周辺の祭祀

会 下 和 宏\*

A Study on the cult in and around paddy fields during the Yayoi period

EGE Kazuhiro

キーワード：弥生時代、水田、祭祀

## はじめに

弥生文化が展開した社会の根底に稲作農業があることを説いた森本六爾は、森本 1935 の最初で以下のように述べている。

「今日の日本人の大半は農業民である。未だ農業型を脱しきらない現在の文化から同じく農業型である弥生式文化を顧みる時、『万葉集』がクラシックであると同じ意味のクラシックを感じ、『万葉集』が近代性に富むというのと同じ意味での近代性を感じる。これは日本では、農業民の世界観を遥かに弥生式の時代にまで遡らしめてよいことを意味している。」

畝傍中学時代に万葉集に傾倒していた森本六爾（堀井 1936）は、昭和初期と万葉集の時代、そして弥生時代という長い時代の隔たりを超越して、いずれの時代の人々も稲作農耕を基盤とする農業民としての精神世界を共有していたことを感じとっていた。

さて本稿では、弥生時代の社会を最も特徴付ける稲作農耕がまさに営まれた現場である水田やその周辺における農耕祭祀の一端やその意味についてアプローチすることを命題と

する。とはいえ、物質資料である考古学的な痕跡のみから祭祀の意味について解釈することは困難であることから、冒頭の森本六爾の言葉を念頭に置いて、民俗学や古代の文献を媒介させることによって弥生人の精神世界へ接近したい。

なお、弥生時代の水田やその周辺における祭祀についての論究には、すでに乙益 1981、森 1981、中村 1999 などがある。また、農耕祭祀に関わると目される銅鐸祭祀の復元・解釈において、後述する「田の神」≡「穀霊（稲魂）」と関連付けた議論（春成 1982・1987 など）がある。本稿の骨子は、こうした先学に負う部分が多いことを明記しておきたい。

## 1. 各地の事例

本節では、各地の弥生時代水田が検出された遺跡において、水田遺構内やその近辺における祭祀に関連しそうな痕跡の事例を概観する。

### (1) 佐賀県唐津市菜畑遺跡（図 1-1）

唐津平野の西側、山地から東側に派生する丘陵と丘陵の間の谷部に立地している。標高約 2.9～3.0m あたりで、弥生時代前期初頭

---

\* 島根大学総合博物館

の矢板杭列を伴う水田、水路、堰などが検出されている。詳細は不明だが、水田と居住域との境界に相当する位置において、彩文土器および棒で串刺しにされたイノシシ下顎骨3体が置かれた状態で検出されており、祭祀遺構として報告されている。

春成秀爾氏は、本遺跡や奈良県田原本町唐古・鍵遺跡などでみられるこうした「ブタ」「イノシシ」の下顎骨が、住居の壁または住居の入口、あるいは集落の入口に棒や紐を使って掛けてあって、もっぱら住居内または集落内に侵入する死霊や邪霊を撃退する辟邪の役割をはたしていたと解釈している（春成1993）。一方、伊藤信博氏は、後述する『古語拾遺』の記述の考察において、この祭祀遺構が、水田の水口などで執行された動物供犠の祭祀である可能性を述べる（伊藤2004）。

## (2) 福岡市板付遺跡

福岡平野を北流する御笠川と諸岡川にはさまれた低丘陵および、その東西の沖積低地に立地している。1978年度に調査されたG-7a・b区では、板付I式土器・夜臼式土器共伴出土時期と夜臼式土器単純出土時期のそれぞれにおいて、水田とそれに伴う施設が検出されている。板付I式土器・夜臼式土器共伴出土時期では、上下2面の水田と北流する水路・堰、および両者を接続する取排水溝が検出されている。詳細は不明だが、水路の堰周辺からは、「祭祀に供せられたと考える大形壺の完形品や丹塗りされた木製品」が出土したと報告されている。

## (3) 鳥取県米子市目久見遺跡（図1-3）

ラグーンである中海の南東側沖積地に立地している。標高約1.0～2.0mで検出された弥生中期後葉から中期末の第1水田（第5層）からは、分銅形土製品が出土している。なお、水田の東隣には、居住区とされる土坑・

ピット群が検出された範囲や幅約6m・深さ約1.2mを測る人工的に掘られたとみられる「河川」が検出されており、ここからも分銅形土製品<sup>(1)</sup>・土笛など、祭祀に関連する遺物が出土している<sup>(2)</sup>。また、居住区で検出された土坑「YSK03」からは、分銅形土製品と焼けた鹿の歯が出土しており、祭祀に関連する遺構と報告されている。

## (4) 鳥取市松原田中遺跡（図1-4）

ラグーンである湖山池南西側の沖積地、湖山川の東岸側に立地しており、標高約1.0～2.5mに形成された低湿地遺跡である。2010年度は、1・2区が発掘調査され、以下の通り、水田耕作土や水田に隣接した灌漑用水路において、祭祀に関わる可能性をもった遺物が出土している。

1区では、第7面（第7層上面）において水田7区画と畦畔が検出されている（図1-4a）。水田の耕作土と推定される第7層からは、弥生中期の土器、石包丁のほか、分銅形土製品・土玉が出土している。

2区では、第6面（第6層上面）西側において水田2区画と畦畔が検出されている（図1-4b）。水田の耕作土と推定される第6層からは、弥生中期中葉から後期中葉頃の土器や石鏃・石包丁・砥石・碧玉製素材・石核・土製円盤などのほか、分銅形土製品の破片が出土している。

さらに下位の第7面では、調査区西側で、水田2区画および南東-北西方向の畦畔、その東側に平行する重なりあった3条の「溝2136・2137・2138」、その東側にピット群が検出されている（図1-4c）。「溝2136・2137」の埋土は水成層とされており、水田の東側外縁に伴う灌漑用水路とみられる。「溝2136」からは、弥生中期中葉以降の土器、石鏃・石斧・石鋏・石包丁などの石器、土製円盤・

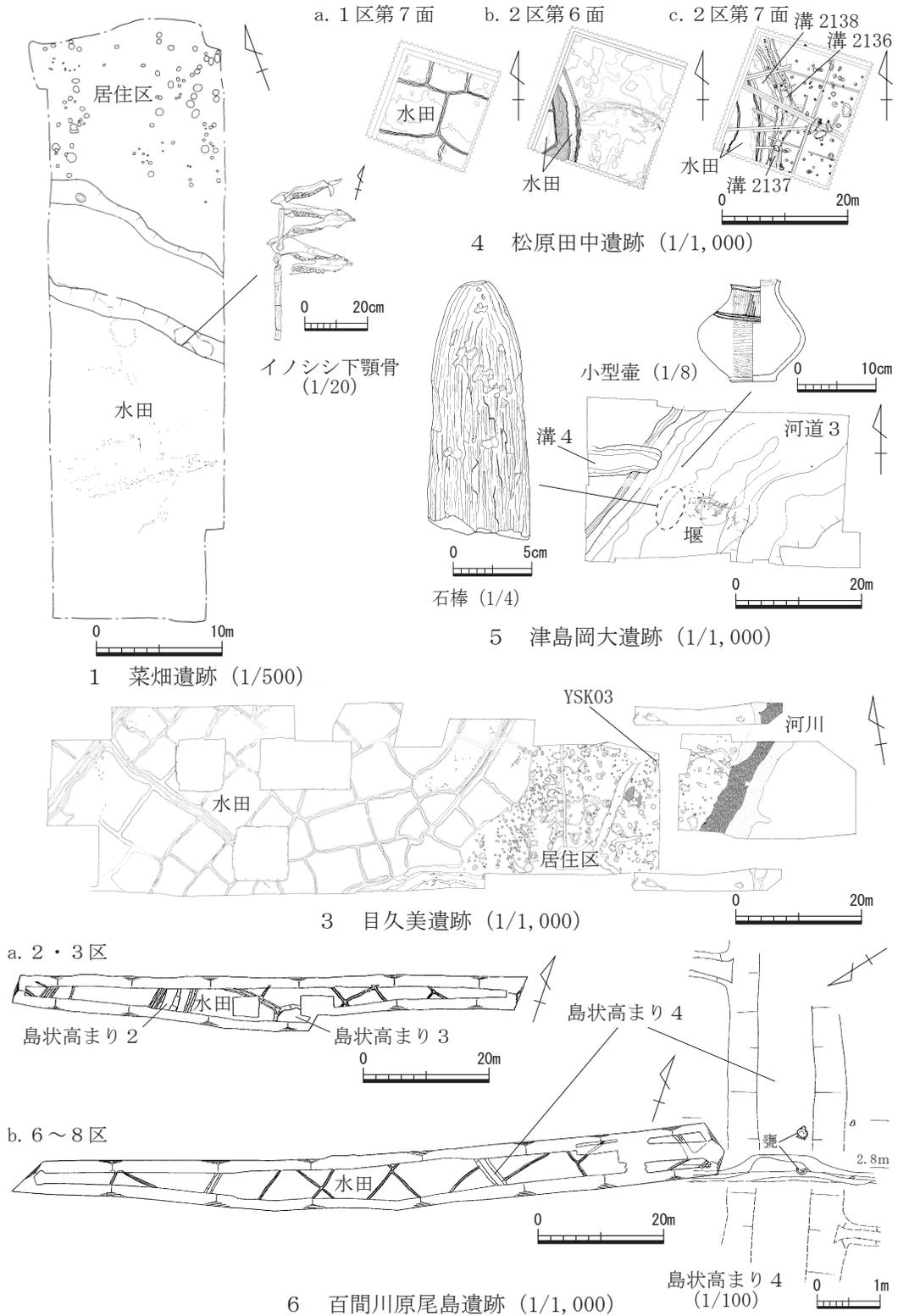


図1 水田や周辺における祭祀の事例 (その1)

紡錘車などの土製品、玉類素材などのほか、鉛バリウムガラス製管玉や土玉などの特殊な遺物が出土している。また、「溝 2137」からは、弥生中期中葉の土器・石包丁のほか、ミニチュア土器が出土している。

#### (5) 岡山市津島岡大遺跡 (図 1-5)

岡山平野北部、旭川の西側に立地している。第 23 次調査区の標高 2.3m 前後からは、最大幅約 28m・深さ約 1.8m・最深部標高 +0.54m を測る北東から南西に流れる「河道 3」が検出されている。河道内部には、流れに直交する方向で杭列・支保材・横木・礫からなる堰が構築されていた。「河道 3」堰構築箇所の西岸からは、幅約 4.8m の「溝 4」が派生していることから、この「溝 4」が導水路として機能していたものと考えられる。周辺調査区において水田は検出されていないが、こうした堰・導水路の配置から、当調査区の西方近辺に水田が広がっていたと推定される。

「河道 3」内における堰近辺の「溝 4」取水口側からは、小礫 1 点が入れられた弥生前期中葉の小型壺が意図的に置かれた状態で出土している。また、堰下流側の河道底面付近からは長さ 16.5cm の結晶片岩製石棒が出土している。こうした小型壺と石棒は、堰近辺で出土していることから、取水口における祭祀のなかで儀礼的に遺棄されたものと解釈されている (光本 2006)。

#### (6) 岡山市百間川原尾島遺跡 (図 1-6)

岡山平野南東部、旭川の東岸側に立地している。1994・1995 年度に発掘調査された百間川以西 A 地区からは、標高約 2.5～2.7m で島状高まりと畦畔によって区画された弥生後期の水田が検出されている。このうち、2・3 区における最大幅約 2.8m・高さ約 66cm を測る「島状高まり 2」内と「島状高まり 3」内からは、弥生後期中葉の甕・高坏などの弥

生土器が多量に出土している (図 1-6a)。また、6～8 区における帯状の「島状高まり 4」内からは、弥生後期中葉の完形に近い甕が倒壊した状態で出土したほか、サヌカイト製打製石包丁などが出土している (図 1-6b)。

#### (7) 岡山市百間川今谷遺跡 (図 2-7)

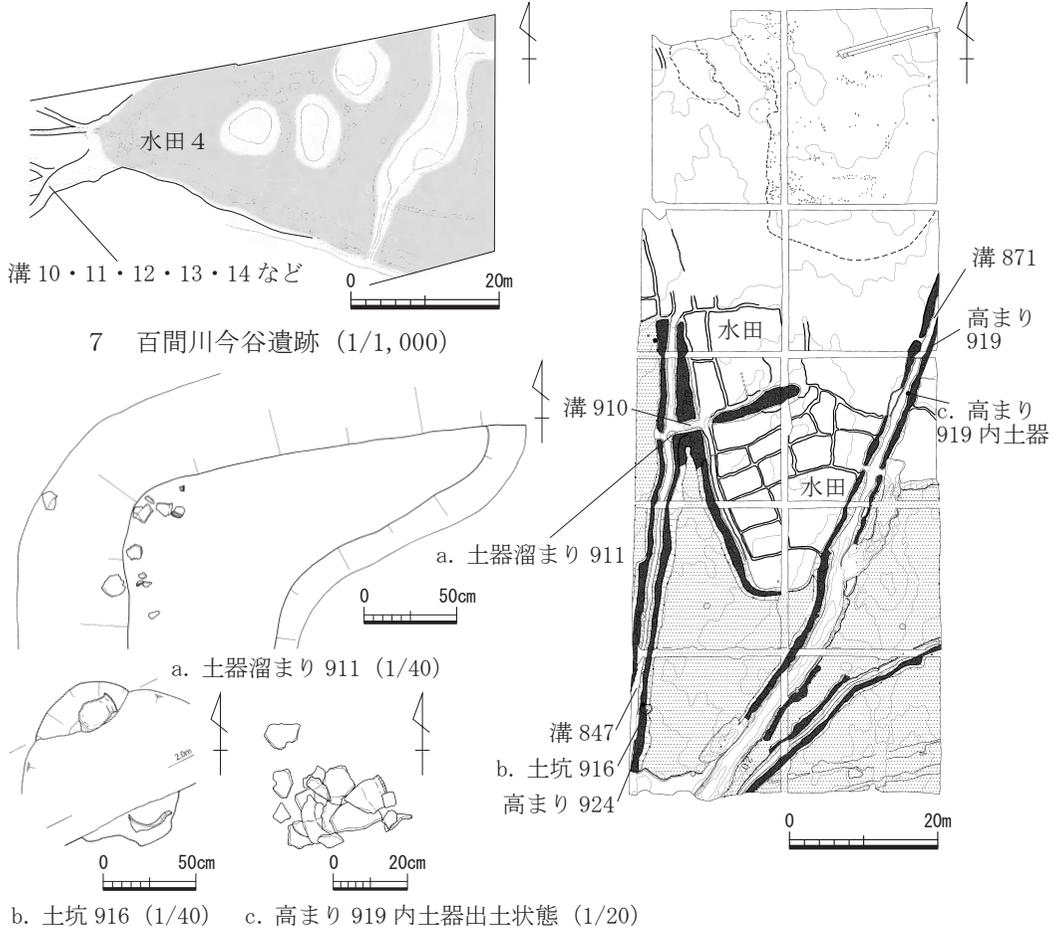
上記した百間川原尾島遺跡の東側にある百間川沢田遺跡・百間川兼基遺跡のさらに東側に位置する。標高約 1.0～1.2m で検出された、弥生後期中葉から終末期にかけて耕作されたと推定される「水田 4」耕作土層からは、甕形土器などとともにミニチュア土器・手づくね土器・モモ種子 63 個が出土している。

また、「水田 4」に西側から給水する弥生後期後葉を中心とした「溝 10・11・12・13・14」・「水路 1」からは、多量の弥生土器が出土している。なかでも「溝 12」からはミニチュア土器が、「溝 13」からはミニチュア土器や胴部や底部に穿孔が施された甕が出土している。

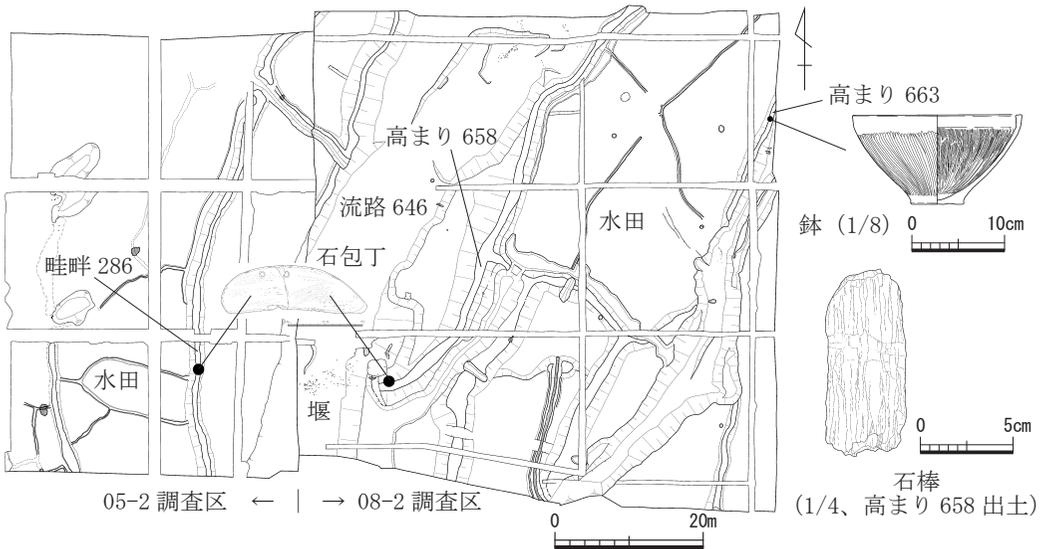
#### (8) 大阪府東大阪市・八尾市池島・福万寺遺跡 II 期地区 07-2 調査区 (図 2-8)

河内平野東部、生駒山麓から広がる扇状地と玉串川自然堤防に挟まれた低地部に立地する。標高約 1.6～1.9m の 14-2a 面では、調査区中央部で水田が検出されており、これに伴う灌漑水路の肩部で、以下のような祭祀とみられる痕跡が散見される。

水田域の西側を南北に流れる「溝 847」とそこから水田に導水する「溝 910」との交点付近肩部からは、弥生前期の復元可能な土器片が散らばった「土器溜まり 911」が検出された (図 2-8a)。さらに、この「溝 847」の東側肩部にある堤状の「高まり 924」の下部からは、直径 0.55m 程の「土坑 916」が検出されており、完形の鉢が出土した (図 2-8b)。これは、溝の掘削に伴って、その肩部に土坑を掘削し、土器を故意に埋納したもの



8 池島・福万寺遺跡Ⅱ期地区 07-2 調査区 (1/1,000)



9 池島・福万寺遺跡Ⅱ期地区 08-2 調査区 (1/1,000)

図2 水田や周辺における祭祀の事例 (その2)

と考えられている。また、水田域を南西から北東に貫く「溝 871」の東側肩部にある堤状の「高まり 919」からは、ほぼ完形の弥生前期の甕が出土しており（図 2-8c）、これは溝の掘削に伴って、その肩部に埋納されたようである。

#### (9) 同遺跡 II 期地区 08-2 調査区 (図 2-9)

弥生中期後葉の遺構面である標高約 2.5～3.0m の第 13-1 面において、南西から北東方向にはしる「流路 646」と堰の痕跡、4 条の溝、高まり、さらに水田域とそれに伴う水口などが検出されている。調査区中央部では、「流路 646」を挟んで、その東側肩部に堤状に並行する「高まり 658」と西側肩部に並行する「畦畔 286 (08-2 調査区「高まり 666」)」が検出されている。ここでは、「高まり 658」盛土中から、残存長 10.0 cm 程の結晶片岩製石棒が出土している。さらに、2 片に分割された石包丁の破片が、「高まり 658」内と「畦畔 286」内のそれぞれにおいて出土しており、石包丁が分割された後、意図的に埋納されたものと想定される。この他、調査区東側で検出された「高まり 663」からは、弥生中期後葉の鉢が伏せられた状態で出土している。

#### (10) 同遺跡 II 期地区 09-1 調査区 (図 3-10)

標高約 1.3～2.0m の第 13 面から、水田と畦畔・水路が検出されている。第 13 面下位の第 13 層から出土した甕・広口壺などの弥生土器のうち、大畦畔 467 内で出土しているような「完形に近いものは、畦畔を除去している段階で検出されたことから、畦畔を築いている際に意図的に埋め込まれた」と考えられている（図 3-10a）。

#### (11) 同遺跡 II 期地区 09-2 調査区 (図 3-11)

標高約 1.2～2.3m の第 14-1 面では、調査区中央を南北に貫く「流路 1609」があり、その両側に弥生前期の水田・水路が検出され

ている。ここでは、畦畔盛土内などに祭祀行為によって埋納された、あるいは洪水で流されてきた、双方の可能性がある 4 点の壺形土器の出土が報告されている。

このうち、「流路 1609」の東岸肩部にある「畦畔 1713」の裾部分からは、弥生前期後葉に比定される広口壺が第 14-1 面にめり込ませるように正置状態で出土している。器表は風化しておらず、「面埋没直前にここに置かれたか、面を埋没させる洪水の際に流れて、たまたまここに沈んだ」ものと推定されている。

一方、「流路 1609」西岸にある「溝 1646」西側肩部近くにある「畦畔 1647」が途切れた部分からは、弥生前期の広口壺が、底部を正置状態にして、破片が北側に飛散した状況で出土している。出土位置は、畦畔が途切れている場所であることから、土器が水口に置かれた、ないしは畦畔内に埋納された後、畦畔盛土が侵食された可能性があると考えられている。

#### (12) 京都府八幡市内里八丁遺跡

1990～1993 年度調査 B 地区の標高約 10.8m で 13 区画の水田が検出されている。B 地区南西部の水田畦畔内で検出された土器溜まり SX10 では、弥生終末期から古墳時代初頭の甕などが上下に重なった状態で出土している。掘形が確認されていないことから、畦畔構築時に埋納された可能性がある。

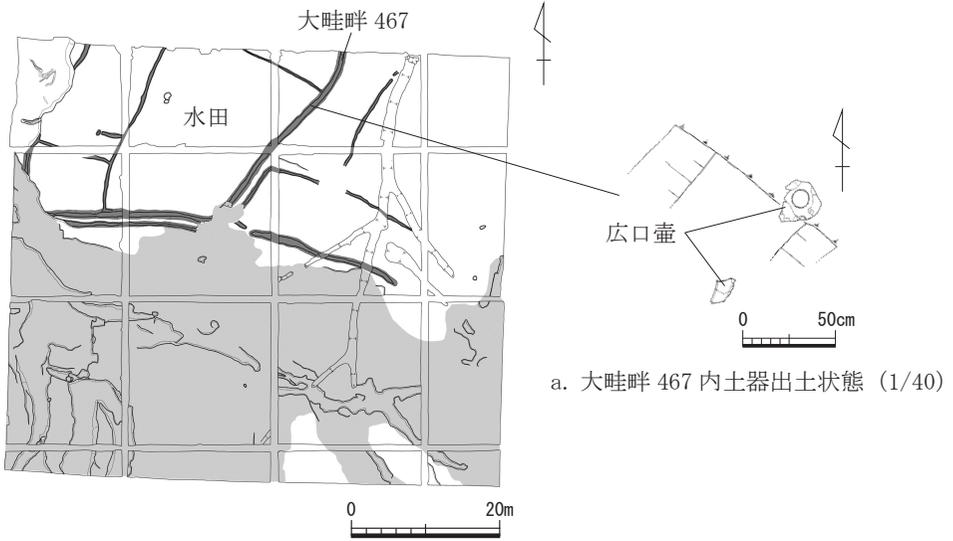
## 2. 弥生時代における

### 水田とその周辺の祭祀

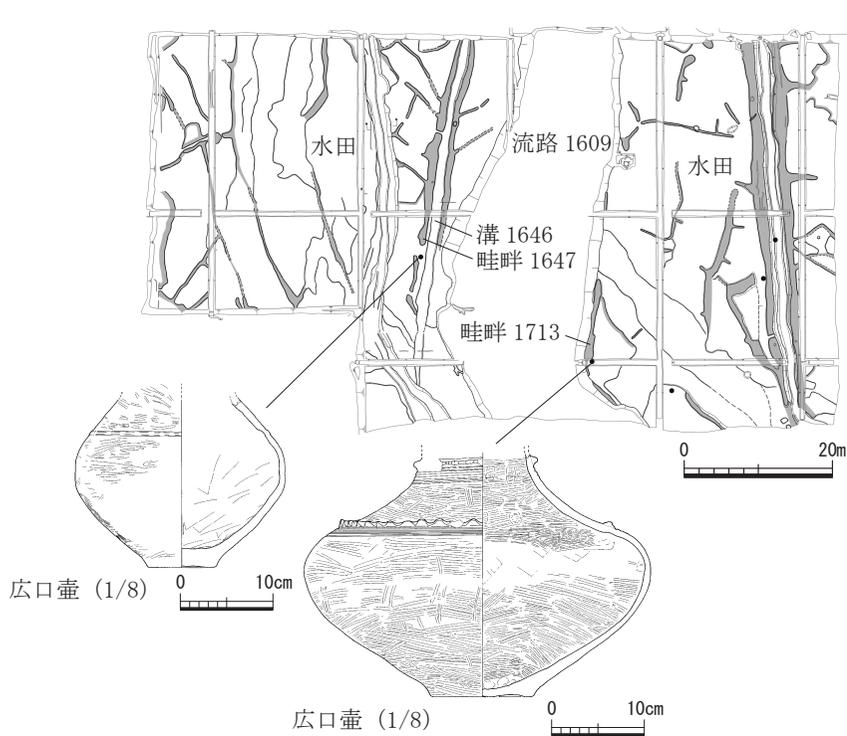
前節では、各地の水田やその周辺における祭祀と思われる痕跡について概観した。これらを再度整理すると、以下のようになる。

#### ① 水田内における祭祀

目久美遺跡、松原田中遺跡、百間川今谷遺



10 池島・福万寺遺跡Ⅱ期地区 09-1 調査区 (1/1,000)



11 池島・福万寺遺跡Ⅱ期地区 09-2 調査区 (1/1,000)

図3 水田や周辺における祭祀の事例 (その3)

跡では、弥生中期から後期にかけての水田内や水田耕作土内から分銅形土製品・土玉・ミニチュア土器・手づくね土器、モモ種子など、特殊な遺物が出土しており、水田内部において何らかの祭祀が執行されたことが推定される。

#### ② 水田畦畔・「島状高まり」における祭祀

百間川原尾島遺跡、池島・福万寺遺跡Ⅱ期地区 08-2 調査区、同遺跡Ⅱ期地区 09-1 調査区、同遺跡Ⅱ期地区 09-2 調査区、内里八丁遺跡では、弥生前期から古墳時代初頭の水田畦畔や「島状高まり」において、完形に近い土器や多量の弥生土器、石棒・石包丁などが出土している。完形に近い土器は、正置ないし倒置状態、あるいは重ねられた状態で畦畔・高まりに意図的に据え置かれたり、埋納されたりしたものと推定される。

#### ③ 水田への導水路・水口における祭祀

板付遺跡、松原田中遺跡、津島岡大遺跡、百間川今谷遺跡では、弥生前期から後期の水田に導水する溝、あるいは河川から取水する堰近辺において、ミニチュア土器や穿孔を伴う土器を含む完形に近い弥生土器のほか、土玉・ガラス製管玉・石棒などが出土している。また、池島・福万寺遺跡Ⅱ期地区 09-2 調査区では、畦畔が途切れた水口の可能性がある場所に弥生前期の壺が置かれていた。

### 3. 古墳時代から古代における

#### 水田やその周辺の祭祀

前節でみた弥生時代における水田やその周辺での祭祀①～③の痕跡に類似した状況は、古墳時代から古代においても見出すことができる。以下に、その一部をあげておきたい。

鳥根県大田市大家八反田遺跡では、旧河川内の取水堰および、そこから派生する溝が検

出されており、調査区内ないし近辺に水田が存在していた可能性がある。この溝や旧河川肩部などから、古墳中期中葉頃の多量の土器、手づくね土器、勾玉、石製有孔円盤、ガラス製小玉、勾玉形・柄杓形・鏡形などの土製模造品、モモ・クルミ・トチなどの種子が出土している。多量の土器ないし土器内容物を用いたこうした祭祀の様相は、前節③の水田導水路における祭祀の状況と類似する。また、松尾充晶氏は、モモが初夏の限られた時季に結果することから、保存されていたクルミやトチの実とともに、この時季に祭祀が執り行われ、供献されたと推定している（松尾 2015）。祭祀執行の季節を知るうえで、重要な指摘である。

群馬県高崎市芦田貝戸遺跡では、5 世紀末の榛名山二ツ岳降下火山灰（FA）<sup>③</sup> に埋没した 1260 区画以上もの水田址と畝状遺構が検出されている。Ⅲ区-F の大畦畔内からは、ほぼ完形の土師器坏が正置で埋められていた。またⅡ区では、東側の水田址と西側の畝状遺構の境界に位置する、用水路の機能をもった幅約 10m の南北大溝が検出されており、この西側肩部の土堤状高まりから、重なった状態の土師器の坏・高坏や滑石製白玉などが出土している。こうした事例も前節②③に相当する祭祀といえよう。また、畑の事例となるが、Ⅱ区-D の畝状遺構では、榛名山二ツ岳降下火山灰（FA）に直接埋没した土師器坏・須恵器坏などが並べられた状態で出土している。

長野県更埴市屋代遺跡群⑥区では、7 世紀最末から 8 世紀前半の水田畦畔水口付近で陽物形木製品が出土している。また、9 世紀後半から末の水田でも、畦畔内や畦畔上、水路分岐点付近からウシ・ウマの骨やウマの歯、正置状態の須恵器甕などが出土しており、前

節②③に相当する祭祀といえよう。この水田を覆う洪水砂Ⅲ層は、『類従三代格』などに記述がある888(仁和4)年5月8日(新暦6月20日)の大洪水時のものに比定される可能性が高い(寺内2002)。洪水砂Ⅲ層下部は、比較的均質的な粒度の砂で構成されており、堆積時には耕作土を多少巻き上げる程度で、田面を剥落する程ではなかったと観察されている。出土土器は、大きく破損することもなく、原位置を保っていることから、洪水は緩やかに水位が上昇していく溢流氾濫であったと考えられている(寺内2002)。この見解を首肯すれば、洪水によって土器が埋没した5月8日(新暦6月20日)に近い時期に祭祀が執行されていたことが推定されよう。

群馬県前橋市柳久保遺跡では、1108年に降下したと考えられる浅間B軽石(早川・中山1998)に覆われた水田の水路付近の耕作土中から、9～10世紀頃とみられる5枚重ねの土師器坏、墨画土器・ブタ橈骨、ウマの歯などが出土している。前節①ないし③に相当する祭祀といえよう。

#### 4. 豊穰と生殖・多産

9世紀初頭に成立した『古語拾遺』では、御歳神の崇りのために、蝗<sup>(4)</sup>による稲苗の虫害が発生した際、それを鎮めるための方策が下記のように述べられている。白猪・白馬・白鶏を御歳神に献上し、「以牛完置溝口、作男莖形以加之」(斎部1985:p.54)、すなわち牛肉を水田の水口に置き、<sup>おほざがた</sup>男莖形のものを作って加える、さらに葱子、蜀椒、呉桃(クルミ)の葉<sup>(5)</sup>、塩を畔に置くとある。水口に男莖形を置くのは、その活力・生命力が、萎えた稲苗を刺激して蘇生させることを期待したものと解釈されている(千葉1975、春成

1996)。また、「男莖形の威力によって虫を退散させるという意味」、あるいは「米を産み出す水田を女性とみるならば、水口すなわち水田への入口は女陰の象徴であり、そこに立てた男莖形とは対の関係になり、「子どもを産み出すすさまじい威力をもつ男女の性行為が稲の豊作を促すという意味」をもっていたとも解釈されている(春成2000)。

『古語拾遺』に記述されたこうした呪術の伝承は、まさに前節でみた屋代遺跡群・柳久保遺跡における遺物出土状況と重なる内容であろう(水野1985、宮島ほか2000など)。また、第3節における、津島岡大遺跡の堰近辺や池島・福万寺遺跡Ⅱ期地区08-2調査区「高まり」遺構でみられた弥生前期から中期にかけての石棒も、『古語拾遺』で述べられる男莖形をアイテムとした儀礼を彷彿とさせる。両者の時代は800年以上の乖離があり、その系譜的繋がりには明確にできない。しかし、人間の生殖による出産・多産と稲の豊穰のイメージを重ね合わせる発想は普遍的なものであり<sup>(6)</sup>、これに根差した儀礼は、時代を越えて行われた類感呪術(フレイザー2004:pp.61-131)であったと考えられる。

また、百間川今谷遺跡の水田耕作土や大家八反田遺跡の水田付近にあるとみられる溝・河川肩部からは、モモ種子が出土していた。「桃」は、言語学的、民俗学的には「股」「百」に通じ、形状が女性器に類似することから、女性の生殖力・多子性の象徴とみられている(王秀文1999)。また、古事記にみえる、イザナキノミコトが黄泉国から逃げ帰る際、桃の実を追手に投げつけて撃退したという黄泉国訪問譚の神話は、古代において桃が邪鬼を払う神秘力・呪力をもつと観念されていたことを示している<sup>(7)</sup>(王秀文2000)。こうした視点からすれば、水田耕作土や水田に接続す

る溝・河川周辺からのモモ種子の出土も、石棒と同様に、生殖力・生命力を象徴する儀礼の痕跡であり、これによって水田の生産力を刺激するという意味をもっていたと解釈できよう。

## 5. 民俗誌にみる稲作儀礼

様々な民俗誌によれば、日本の稲作儀礼は下記の儀礼群から構成される（小川 1999）。

1. 予祝儀礼
2. 播種儀礼
3. 田植え儀礼
4. 成育儀礼
5. 収穫儀礼

1は、年初から小正月に行われるもので、田打正月・鋤入れ・庭田植・田遊び・稲の花・餅花・鳥追い・モグラ打ち・粥占・豆占・鳥占いなどがある。2は、水口祭・ミトマツリ・種子播き祝いなどによって、春に「田の神」を迎える儀礼である。3は、田植開始時に行われるサオリ・サビラキ・サイケ・サンバイオロシなどと言われる初田植の儀礼および、さなぶり・サノポリ・しろみて・泥休み・馬鋤洗い・野上りなどと言われる田植え終了を祝う儀礼である。4は、害虫に対する虫送り、早魃時の雨乞い、台風に対する風祭、長雨に対する日乞い・青祈禱などで、夏に行われる。5は、秋の稲刈り開始時の穂掛け、終了時の刈上げ、脱穀・調整後の稲上げ・庭上りの儀礼である。

第2節③に相当する水口や導水路などにおける祭祀は、上記の民俗誌を参考にするなら、主として儀礼2～4に関連が深そうで、主に春から夏にかけて執り行われたと推定される。このことは、大家八反田遺跡における祭祀が、モモが結果する初夏に行われたと推定

されていることとも整合しよう。

また日本列島では、通常、上記の儀礼2の時季である春に「山の神」が山から下って「田の神」となり、儀礼5の時季である秋に「田の神」が山に帰って「山の神」となるといった、一つの神が季節とともに神格を変えて、田・山・天・家などの間を去来するという信仰が広くみられる<sup>(8)</sup>（石塚 1954、倉田 1944：pp.115-128）。そして、儀礼2の水口祭において、水田の水口にヤナギ<sup>(9)</sup>・クリ・カツラ・ツツジ・イボタ・カマヅカ・ヒョウビ・ヤマブキなど、季節の花や木の枝を刺すのは、こうした「田の神」を勧請する憑代としての意味をもつとされている（倉田 1944：p.131-134）。また、森田悌氏・金田久璋氏は、第4節でふれた芦田貝戸遺跡などでみられる、畑の隅から土器が出土する古墳時代の事例について、「地面の神である土地や地主神を耕営に際し祀ったことが考えられるが、・・・古代農民たちも耕地の隅に<sup>いわいべ</sup>斎瓮を据え神の憑代とし、神を招き降り、加護を願った」と推定している（森田・金田 1996：pp.28-30）。民俗学の知見による以上のような解釈を参考にすれば、類似した状況を示す第1・2節でみた弥生時代における祭祀事例も、水田に宿る土地の神のほか、去来する「田の神」を観念し、祀っていたことが想像される。

## おわりに

本稿では、弥生時代の水田遺構やその近隣における祭祀の痕跡を取り上げ、後世の類似事例や民俗誌などから、その意味についてアプローチした。とはいえ、儀礼の最終的な痕跡にすぎない遺構・遺物の状況から祭祀の意味に切り込んでいくことの困難さが改めて痛感された。今後は、これまでに検討してき

た水田以外の場所における祭祀（会下 2022・2023）、墳墓祭祀（会下 2015）なども包括して、弥生人の祭祀の体系や精神世界に迫っていくことを課題としたい。

## 付 記

このたび、大橋泰夫先生が定年退官されますこと、まことにおめでとうございます。島根大学鳥飼宿舎で1年間ご一緒させていただいた頃が大変懐かしく、年月の流れの早さを改めて感じます。これまでの島根大学の教育研究、島根県の考古学・文化財行政に対する多大なご功労に敬意を表し、感謝申し上げるとともに、先生の今後のご健康とご活躍を心より祈念いたします。

## 註

- (1) 鳥取県内における分銅形土製品の出土状況を検討した京嶋覚氏によれば、以下のA・B群2相があるとしている（京嶋 2023）。A群は台地・丘陵上の居住域からの出土、B群は流路に近接する低地部や河川に近い扇状地からの出土である。B群の出土状況の場合は、分銅形土製品が水に関連する祭祀のアイテムとして使用されたことを示唆しよう。
- (2) 隣接する第8次調査区からも「河川」の延長が検出されており、その近隣から盾形木製品の破片が出土している。これは、水路に関連した祭祀に関わる遺物と推定される（会下 2022）。
- (3) 群馬県渋川市内のFAに埋没した樹幹のウイグルマッチング年代測定から割り出した年代値として、AD491-500（AD 497/+ 3/-6）が報告されている（早川ほか

2015）。

- (4) 蝗はウンカのこととされる（池邊 1928：p.691、林 2019）。
- (5) 薏子はハトムギ、蜀椒はサンショウのことで、クルミの葉とともに、いずれも薬となる（伊藤 2004）。
- (6) 世界各地の民族誌でも、あらゆる農耕社会において「大地の豊穰性と女性の多産性との間に見る連帯性」が顕著な様相の一つであるといわれている（エリアーデ 1968：p.104）。
- (7) 福永光司氏は、こうした思想の源流を中国の道教に求めている（福永 1996）。百間川今谷遺跡出土のモモ種子は、弥生後期中葉から終末期の事例であることから、モモに対する呪術的観念が中国に求められる場合、当該期における道教的思想ないしその中心となる神仙思想の西日本への断片的な伝播の可能性も視野に入れておく必要がある。
- (8) 「田の神」とされるなかにも厳密には、稲そのものの穀霊と、これを外部から守り育てる神との二系統に弁別でき、前者は家と田の間を、後者は山と田の間を去来するという論究もある（石塚 1954、藤原 1996、森田・金田 1996：pp.71-78、など）。
- (9) 『万葉集』に下記の恋歌がある。  
 青柳の 枝伐り下ろし 齋種蒔き  
 ゆゆしき君に 恋ひわたるかも  
 （巻 15-3603 作者未詳）  
 歌意は、「青柳の枝を切り取り、苗代田の水口に刺して、齋み清めた種を蒔く、その齋種のように、恐れ謹むべきあの方を恋慕い続けることよ」（阿蘇 2012）とされ、古代においてもヤナギの枝を水田の水口などに刺す風習があったことを思わせる。

引用文献

- 阿蘇瑞枝 2012『萬葉集全歌講義（卷十五・卷第十六）』第8巻 笠間書院
- 池邊眞榛 1928『古語拾遺新註』大岡山書店
- 石塚尊俊 1954「納戸神をめぐる問題」『日本民俗学』第2巻第2号 pp.9-41
- 伊藤信博 2004「『御霊神』の誕生(2)」『言語文化論集』25-2 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 pp.23-44
- 斎部広成撰・西宮一民校注 1985『古語拾遺』岩波文庫
- 会下和宏 2015『墓制の展開にみる弥生社会』同成社
- 会下和宏 2022「山陰地域における標高0m前後の遺跡の様相」『博古研究』第62号 pp.19-32
- 会下和宏 2023「日本海沿岸地域における弥生時代の水辺の祭祀」『島根考古学会誌』第40巻 pp.49-54
- エリアーデ（堀一郎訳）1968『大地・農耕・女性 比較宗教類型論』未来社
- 王 秀文 1999「桃のシンボリズム(2)」『日本研究』第19巻 pp.123-158
- 王 秀文 2000「桃のシンボリズム(3)」『日本研究』第20巻 pp.125-171
- 小川直之 1999「稲作儀礼」『日本民俗大辞典』上 吉川弘文館 pp.115-116
- 乙益重隆 1981「弥生時代の信仰遺跡・遺物にみる二つの視点」『神道考古学講座』第1巻 雄山閣 pp.145-183
- 京嶋 覚 2023「青谷上寺地遺跡出土の分銅形土製品－出土状況の検討とその評価－」『島根考古学会誌』第40巻 pp.37-48
- 倉田一郎 1944『農と民俗学』六人社
- 千葉徳爾 1975「女房と山の神」『季刊人類学』6巻4号 pp.3-88
- 寺内隆夫 2002「更埴条里遺跡・屋代遺跡群に見る災害と開発」『国立歴史民俗博物館研究報告』第96巻 pp.23-51
- 中村慎一 1999「農耕の祭り」『神と祭り』古代史の論点5 小学館 pp.85-110
- 早川由紀夫・中島秀子 1998「史料に書かれた浅間山の噴火と災害」『火山』第43巻第4号 pp.213-221
- 早川由紀夫ほか 2015「榛名山で古墳時代に起こった渋川噴火の理学的年代決定」『群馬大学教育学部紀要 自然科学編』第63巻 pp.35-39
- 林 道義 2019「害虫駆除をめぐる思想の変遷について－前近代の農業関連史料を中心に」『博物館學紀要』第43輯 pp.1-23
- 春成秀爾 1982「銅鐸の時代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1巻 pp.1-48
- 春成秀爾 1987「銅鐸のまつり」『国立歴史民俗博物館研究報告』第12巻 pp.1-38
- 春成秀爾 1993「豚の下顎骨懸架－弥生時代における辟邪の習俗－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50巻 pp.71-140
- 春成秀爾 1996「性象徴の考古学」『国立歴史民俗博物館研究報告』第66巻 pp.69-160
- 春成秀爾 2000「正月と粥杖」『歴博』第98号 pp.6-10
- 福永光司 1996「鬼道と神道 中国古代の宗教思想と日本古代」『宗教』日中文化交流史叢書第4巻 大修館書店 pp.2-37
- 藤原 修 1996「田の神と稲の神」『田の神・稲の神・年神』御影史学研究会民俗学叢書8 岩田書院 pp.115-191
- フレイザー、J. G.（神成利男訳）2004『金枝篇 呪術と宗教の研究1 呪術と王の起源（上）』国書刊行会
- 堀井甚一郎 1936「森本六爾君を憶う」『大

- 和志』第3巻第2号 pp.85-88
- 松尾充晶 2015「古墳時代の水利と祭祀」『古代文化研究』第23号 pp.69-94
- 光本 順 2006「堰の構築・使用過程と社会関係」『津島岡大遺跡17』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第22冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.106-113
- 水野正好 1985「柳久保水田址出土墨画土器の周辺」『柳久保遺跡群Ⅰ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 pp.94-95
- 宮島義和ほか 2000「祭祀・宗教関連資料」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）総論編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書54 長野県埋蔵文化財センターほか pp.125-137
- 森貞次郎 1981「弥生時代の遺物にあらわれた信仰の形態」『神道考古学講座』第1巻 雄山閣 pp.184-235
- 森田 悌・金田久璋 1996『田の神まつりの歴史と民俗』吉川弘文館
- 森本六爾 1935「弥生式文化－Pensees 風に－」『ドルメン』第4巻第6号 pp.94-101

### 遺跡文献

1. 菜畑遺跡：中島直幸ほか 1982『菜畑遺跡』唐津市文化財調査報告第5集 唐津市
2. 板付遺跡：山崎純男ほか 1979『福岡市板付遺跡調査概報（板付周辺遺跡調査報告書（5）1977～8年度）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集 福岡市教育委員会
3. 目久美遺跡：小原貴樹・北浦愛象ほか 1986『目久美遺跡』米子市教育委員会ほか
4. 松原田中遺跡：後川恵太郎ほか 2013『松原田中遺跡Ⅰ』一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X

- 鳥取県教育文化財団調査室
5. 津島岡大遺跡：野崎貴博・光本 順ほか 2006『津島岡大遺跡17』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第22冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
  6. 百間川原尾島遺跡：柳沢昭彦・岡本寛久ほか 2000『原尾島遺跡・沢田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告153 岡山県教育委員会ほか
  7. 百間川今谷遺跡：物部茂樹・高田恭一郎ほか 2009『百間川今谷遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告217 岡山県教育委員会ほか
  8. 池島・福万寺遺跡（福万寺2期地区07-2調査区）：島崎久恵 2011『池島・福万寺遺跡11』大阪府文化財センター調査報告書第212集 大阪府文化財センター
  9. 池島・福万寺遺跡（福万寺2期地区08-2調査区）：井西貴子・松尾奈緒子ほか 2011『池島・福万寺遺跡13』大阪府文化財センター調査報告書第219集 大阪府文化財センター
  10. 池島・福万寺遺跡（福万寺2期地区09-1調査区）：若林幸子・山崎健 2011『池島・福万寺遺跡14』大阪府文化財センター調査報告書第229集 大阪府文化財センター
  11. 池島・福万寺遺跡（福万寺2期地区09-2調査区）：三宮昌弘 2012『池島・福万寺遺跡15』大阪府文化財センター調査報告書第230集 大阪府文化財センター
  12. 内里八丁遺跡：竹原一彦ほか 1999『内里八丁遺跡Ⅰ』京都府遺跡調査報告第26冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 芦田貝戸遺跡：田村孝ほか 1980『芦田貝戸遺跡Ⅱ』高崎市文化財調査報告書第19集 高崎市文化財保護協会ほか
- 大家八反田遺跡：松尾充晶 2015「古墳時代

の水利と祭祀』『古代文化研究』第23号  
pp.69-94

屋代遺跡群：寺内隆夫ほか 1999『更埴条里  
遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原  
遺跡）古代1編』長野県埋蔵文化財センター  
発掘調査報告書42 長野県埋蔵文化財セ  
ンターほか／寺内隆夫ほか 2000『更埴条  
里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河  
原遺跡）総論編』長野県埋蔵文化財センター  
発掘調査報告書54 長野県埋蔵文化財セ  
ンターほか

柳久保遺跡：前原照子ほか 1985『柳久保遺  
跡群Ⅰ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団

### 図表出典

図1-1 遺跡文献1：Fig.18・Fig.49を一部  
改変し転載

図1-3 遺跡文献3：図録8を一部改変し転  
載

図1-4 遺跡文献4：図28・図91・図96を  
一部改変し転載

図1-5 遺跡文献5：図42・図49-4・図53  
-S11を一部改変し転載

図1-6 遺跡文献6：図24・図28・図30を  
一部改変し転載

図2-7 遺跡文献7：図177を一部改変して  
転載

図2-8 遺跡文献8：図111・図113・図  
114・図115を一部改変し転載

図2-9 遺跡文献9：図132・図134・図  
135・図137を一部改変し転載

図3-10 遺跡文献10：図91・図93を一部  
改変し転載

図3-11 遺跡文献11：図91・図96を一部  
改変し転載